

風土病との闘い | フィラリア

1962
作品ナンバー0045

文部省特選 第9回東京都教育映画コンクール銀賞 1962年教育映画祭特別賞
東京都教育委員会選定 1962年イタリア・ポポリ映画祭特別賞

この映画は、1961年に奄美大島の離島や四国の僻地で撮影されたが、30数年後の今日では患者はほとんどいなくなった。しかし地球上には今なおフィラリア症に苦しむ人々が大量にいる。



僻地や離島の常として風光はいかにも美しいが、そこには残酷なほど厳しく閉ざされた生活がある。経済的な貧しさだけでなく、風土病がはびこり、人々は半ば諦め、病気と共に生きてきた。風土病には、鉤虫、糞線虫、フィラリアなどがある。フィラリア症は、初期に「草ぶるい」と呼ばれる熱の発作がしばしば起きる。末期は足が象のように太くなる「象皮病」、睾丸がスイカのように大きくなる「陰のう水腫」、尿が白濁して詰まる「乳糜症」など、悲惨な症状を呈する。しかも彼らは働かなければならない。女は太い足で機を織り、男は段々畑や湿田で営々と働く。風土病の研究者たちが訪ねた老人も、陰のう水腫だが何とか働きたいと訴えていた。

フィラリアを媒介するのは蚊である。これらの土地で蚊を採集し解剖すると、フィラリアの仔虫がかなり大きく成長し、口管まで出ているのを見ることができる。こういう蚊に刺されると、その仔虫は人間の体内に侵入しリンパ管やリンパ腺に巣食って親虫に成長し、これが溜まると数十匹も纏れあふ。親虫は長さ10センチくらいもあり、オスとメスが交尾してマイクロフィラリアと呼ばれる仔虫を無数に産む。仔虫は人の体内では成長できず、媒介蚊が人を刺すと血と一緒に再び蚊の体内に移り約2週間で成長し、これが人体に戻り親虫になって巣食うのだ。不思議なことに保虫者の血液中に仔虫が出てくるのは媒介蚊が出動する夜間に限られている。したがって夜間に住民を集めて採血して感染を調べることになる。

記録
35ミリ
白黒／27分
日・英語版

- 自主企画
- 監修
厚生省
- 指導
東京大学伝染病研究所寄生虫研究部
- 協力
愛媛県 八幡浜市
三崎町 瀬戸町
田辺製薬株式会社
シェル石油株式会社

スタッフ

- 原作・指導
佐々 學
- 脚色・製作
村山英治
- 演出・撮影
菊地 周
- 編集
亀井文夫
- 音楽
真鍋理一郎
- 解説
宇野重吉